

# ～KIOKU～

- 田中 敬士 … 「小生のつぶやき」  
園田 孝晴 … 「熊本地震に想う」  
野村 幸生 … 「復興に向けて…感謝を忘れずに」  
西村 博考 … 「震度7の地震体験」  
米村 本熊 … 「オール益城西原」  
林田 正治 … 「今」  
坂上 雄二 … 「熊本地震」  
佐々木 孝裕 … 「熊本地震回顧録」  
石原 和人 … 「地震に思う」  
坂口 勝也 … 「熊本地震を経験して」  
荒瀬 達也 … 「大切なこと」  
下西ノ園 大地 … 「いっとどま、け死ん限い」  
松本 卓実 … 「熊本地震を通じて」  
藪 祐樹 … 「使命感」  
坂田 誠 … 「熊本地震を経験して」

026

# 職員手記 I

# - 小生のつぶやき -



益城西原消防署 副署長 消防司令長 田中 敬士

## なめていた

20年前、阪神大震災に災害派遣され、地震災害というものを身にしみ感じていたにもかかわらず、月日が経って薄れ掛けていたのか、やはり、対岸の火事と、他人事として処理していたのか？・・・なめていた。まさか、まさか！ この熊本に、しかも、この規模の地震が来るとは！？反省しても仕切れない自分がここに居る。

## 誰もやって来ない

ライフラインが絶たれ、電話回線も1本しか使用できない災害対応の中で、情報だけを求められる。催促だけが止まない。所詮、自（署）己完結型。誰も来てくれない・・・。誰かよこせと、伝書鳩を望むなど、考えるほうが野暮だ！！

## やはり災害はないほうがいい

この仕事をしていると、たまには？もしかすると？何らかの災害発生を待っている職員（自分）が居る。とんだことだ！！それはただただ自分のモチベーションを上げるためだったり、経験を少しでも必要と求めるためのエゴの他ならない。この罰当たりめ！

災害なんて市民・町民・村民にとって一つでもないほうが良いに決まっている。暇な時間があればあるほど、有事のために何ができるのか？常に考え備える消防人にならなければ・・・。それが本当のプロである。と、いまさら何を。

「がんばってください・・・」

## なんて、言えない

ある集落は殆ど壊滅した。町が目抜き通りも殆どが赤紙を張られ、復興はおろか復旧さえどれくらいかかるか全く想像がつかない。その場に足を踏み入れ、無駄な努力とさえも思える作業をしている住民の方たちに「がんばってください」なんて、とても言えない自分がいた。私だけだろうか。殺気さえ感じる。

それどころか、その場において、数々の場所に立ち入る度、人間としての力を吸い取られてしまう。原因はわからない・・・疲れた。

## 益城西原消防署と

## 元高遊原南消防本部の力

この4月に赴任する。なんと着任後2週間の出来事。この署の管轄面積は、142km<sup>2</sup>で当局6署の中でも最大の面積を有し、しかも、その管轄を50人で護っている。最初の管内調査で実感したのは、この管内で何か特別な災害が発生したら「やおいかんばい」が、感想だった。それが、現実起こった！しかも、想像を絶する地震災害！！しかし、ここの職員は伝統なのか、自分たちで自分達の管内を決死に護った。今も懸命に一人ひとりが言い聞かせているように出勤してくる。私にはそう写る。

力がある、機動力がある、そして何より、この署に勤務する職員としての自覚がある。自分自身の家が全壊している職員が何人もいるのに・・・。

また？・・・次を？・・・彼らは見据えているのか。

## ある職員をつぶやき

今日も被害調査に出る。その道中で、ランニングをしている若者を見かけた。

一人の職員がその若者を見てすかさずこうつぶやいた。

「走る暇があるならボランティアに行かんかい！」もちろん、その職員の家も被災した。正直に出た言葉だろう。被災もなく普通に生活出来ている人、被災しすべてを失った人。その言葉を聴いたとき、私の心は、今も続いて止まない余震と同じように揺れた。

## 全国の友

発災からこれまで（5月1日）、電話、メール（SMS）やLINEと46人もの人々から心配や激励をいただいている。うれしい限りである。北は青森から南は沖縄まで。それどころか日本を飛び越え韓国からも。ありがたい。時として涙が出そうになる。言葉を耳にして元気になる、活字を見るたび心が震え温まる。

この途切れない便りのお陰で、自分的にこれまでやって行けている気がする。

一生大切な人々。何かあれば「必ず恩返しを」と誓う。

## 消防（戦）士たちの束の間の休息

震災から3週間を迎えた。我が署の屋外にある休憩所では、いつもと変わらぬ光景のように写っている。変わるとしたら、未だに断水が続くために設置された、トイレ用の簡易水槽が3つ。いつものムードメーカー役と笑顔、そして笑い声。このまま続いてほしい。なるべく長い休息が続いてほしい。必ずや近い日、元の風景が現れることを心から願っている。

## 見透かされた機能と備え（ハード面）

これまで何度も危惧し、提案もしてきたのだが・・・やはり、その通りとなった。

- ・自家給油所の必要性。
- ・すぐ駆け付けて来る県内の応援隊、次にやって来る全国からの緊援隊。それを受け入れるだけのスペース。
- ・ライフラインが絶たれた時、防災拠点としての署所の備え。耐(免)震機能、転倒防止等は言うまでもない。

## やはり、応援より受援（ソフト面）

自分的に災害（応援）派遣は経験している。また、元の部署がそれに係わる部署であったため、応援に対しては理解しているつもりである。

その頃から感じていたことだが、受援の方が何倍も大変だと思っていた。その通りだった。

今後、この経験を最大限に生かし、受援対策を熟考し充実しておかねばならない。

- ・署所にその地理等に詳しい人は重要人物と捉える。（道案内等は必要不可欠）
- ・人事異動の際の入れ替え人員には考慮する必要性。（特に異動直後は各部署自体が機能しなくなる）
- ・まずはポイントに最低1人ずつ、的確に配置。（受援体制はそこから）
- ・専属部署（班）の創設 などなど。

## 手紙

今回で3人目。また全国の仲間から実家に荷物が届いた。お米、インスタント食品、お菓子、見舞金から子供たちへの絵本まで。数々の贈り物だ。その中に、一言の手紙が添えられている。これまた文字の重み、そしてありがたさ。目を見開いたまま涙があふれる。いつから・・・泣き上戸になってしまった？とにかく、とにかくありがたい。また、元気を頂く。いや、命のお裾分けを頂く？

感謝。こころからー

## 何か・・・エキスは

日曜日。この雰囲気。この執務室の雰囲気を变えるエキスがほしい。皆に少しでも元気を与えられるものはないか？きっかけはないか？それが今、自分に求められる最大の仕事じゃないのか・・・。日々考える自分がある。本日は手作りケーキとコーヒーゼリー。（食い物だけかい！）少しでも元気に！一瞬でも快楽を与えてやりたい。どうしたら、神よ、私に良きアイデアを与えたまえ。

## 酒を断って・・・

気付くと1ヶ月以上経つが、あれ以来、酒を嗜んでいない。どおりで不規則で、その日にある物を口にしてきた日々にもかかわらず、胃腸の調子は良好。本日も雨、昨年この時期もこんなに雨が降っていただろうか。この度に、ひび割れた管内の山々に雨水が浸み込む。そ

の後のプロセスを思うと、酒など飲んでいられない。自分だけだろうか、雨を恨む。あの日、駆けつけた自分、そして行動、活動内容。思い出せば思い出すほど、素面でいないと、とても耐えられない。でも、いい加減、弾きたい。わがままだろうか・・・。

## 仲間の顔

朝、庁舎に入る。入る前に必ず自分に言い聞かせる。「元気に、元気に！おはよう」と。仲間の顔は日々疲労が増しているように見える。

そういえばあれ以来、休みなしか・・・。恐らく、張り詰めたゴムのように、今後体制が切り替えられ通常体制に戻ると、しばらく元には戻らないんだろうな～。疲れている。来るであろう反動の想像がつかない。

皆、出て来る度に言い聞かせている。「もうひとがんばりだ」、「負けるものか」、「これが俺の仕事だ」と。心の声が聞こえる

## 百日（7月24日）

本日は当署管内における慰霊祭。両町村厳かに実施された。亡くなられた方に心からご冥福を、被災された方にお見舞いと本当の意味で、これからの幸せを一。あれから、もう100日と思うソフト面。まだ、100日と思えるハード面。いつになったら、あの時は・・・と語れる日が来るのか。10年後、20年後、生きてこの目で見て見たい。この町を。この村を。これまであまり考えなかったが、生きたいと思う。その日までー。

## 本震から137日（約5ヶ月）目

また、今日も震度5弱の地震。いまだに・・・。言わずと職員は自主参集。なんと参集率、1時間18分で100%。流石である。幸いに管内に被害はない。思うに。もう、このチームなら何が来ても恐ろしくはない。そして、一人も欠かすことの出来ない存在となっている。しかしながら・・・いい加減、もう終わりにして欲しいものだ！！し、終わりにしたい。

この「つぶやき」は、字の如くこれまで小生が日々つぶやいた内容を走り書きにして書き留めたものです。

熊本市から飛び出し、着任して正味10日目、管内の地名もよくも分からず、職員の名前と顔もうまく一致せず、消防団の団長の顔も拝見する機会がなかった中で、懸命に「この状況を立て直す」「必ず、立て直す」と、自分に言い聞かせた日々でした。

半年が経過し、今は当時の取った行動が部分的にはありますが、すっぽりと空白になって覚えていない自分があることに気付かされています。それほど身も心も疲弊していたのか、年齢のせいには分かりません。

このつぶやきが、自分自身の生き様としてこれからの消防人生への糧となり、また、少しでも、当時の思いや風景を後世に伝えられたらー。その想いと願いを込めて綴ります。

## - 熊本地震に想う -



益城西原消防署 警防課長 消防司令長 園田 孝晴

平成28年4月14日と16日の2回の大地震。

両日とも自宅にいたが、人生で経験したことのない揺れに愕然とする。

特に16日午前1時25分。後に「本震」と言われる地震は、母屋を始め、納屋、道路を滅茶苦茶にしてしまった。「本震」直後に、揺れが続く中、緊急地震速報がなり始める。

1階にいる母は、内壁、天井板が布団に覆いかぶさる中、呼び掛けに反応があったので、掻き分けて引っ張り出し外へ避難させる。

周囲の状況は、前日よりもはるかに酷く、地区は壊滅状態で、道路は塞がれて車、バイクがあっても通行できない状況となっている。

息子夫婦、子供、母を地区の避難所へ行くように指示して、農道を署へと徒歩で向かう。

途中で、益城方面へ行く車両に同乗させていただき、到着した時には、署隊本部がグラウンドに設置されている。途中、長期戦を想定して再び車庫に移動する。益城町、西原村へ職員を派遣し町村の状況把握にあたるが、情報が錯綜してなかなか正確な情報が収集出来ない。

その間にも、次々と非常災害は発生して、県内応援隊での対応となる。その隊には、署員を同乗させ案内役として出場する。その連続で、隊員の疲労もピークに達してくる。明け方、消防局長命で、県内応援隊を解散となる。

その後は、九州各県から集まった緊急消防援助隊に対する支援及び災害対応にあたる。前震から本震、本震後といつ終息するとも分らない状況で、活動もさることながら署員の生活環境もライフラインの寸断で、ままならない状態に精神的、肉体的な疲労は極限状態にある。

今回の、地震で私を始め、多くの職員が被災して、自宅のことを顧みることなく署所に集結し、災害対応にあたることに対して消防士としての任務を全うする責任感を痛切に感じるとともに、益城西原消防署の連帯感「オール益城西原署」が強固なものになる。

## - 復興に向けて… 感謝を忘れずに -



益城西原消防署 総務班 消防司令 野村 幸生

平成28年4月 新しい年度が始まりまだ間もない4月14日21時26分・4月16日1時25分に発生した「熊本地震」…2度の突然の地震に、最初は「夢ではないか」「夢であってくれ」と、現実を受け入れることがなかなか出来なかった日の事を思い出します。

私が勤務する益城西原消防署の施設も、屋内・屋外ともにありとあらゆるものが被災し、すさまじい状況になりました。中でも、署のシンボリック的存在であった主訓練塔も被災し、柱部が座屈、倒壊する恐れがあることから緊急的に解体され、今ではその基礎部分だけが残されています。

このように2度の震度7の地震において、ここに勤務する署員の誰一人として大きな怪我もなく、全員が無事であったことに、感謝し、心から安堵したことを覚えています。

私たち消防署の総務班は、このような災害があると、職員の参集、安否の確認及び庁舎の管理・確認を行い、その状況を対策本部へ連絡することと、職員の活動環境を整えることが業務となります。震災当初は、電気、水道が止まり、どうしたら良いものかと思う間にも、警防隊員の出場は途切れることがありませんでした。

こうした中、活動車両や庁舎用発電機の燃料を確保するにも、いつも給油をするガソリンスタンドも被災し利用できなくなっていたため、燃料補給が出来るところを探すのに苦労しました。

また、災害活動を続けて行く為に無くてはならないものが食事ですが、震災当日は1日分の非常食の備蓄（旧本部時のもの）があったので、何とか使用することができたガスコンロ（LPG）でお湯を沸かし、食事の準備を済ませ署員の人達に食べてもらいました。

しかし、その後については、近くのスーパーやコンビニも被災や商品の配送ができないことから営業しているところが少なく、営業していても品物がない状態で、調達するにも大変でしたが、職員が非番日などに買い物をしてくれたり、家にあったものを持ち寄ったりしてくれたことに非常に感謝しました。

振り返るとあっという間に半年が経ちましたが、当たり前だった日常を取り戻すためには、まだまだ、長い時間が必要です。

これからも、今まで以上に署員一同、心を寄せ合い一歩ずつしっかりと前へ進んで行きたいと思えます。

最後に、「熊本地震」発生からこれまでに、ご支援ご協力をいただいたすべてのみなさまに感謝を忘れないことと、一刻も早い地震の終息、復旧をお祈りいたしております。

本当にありがとうございました。

## - 震度7の地震体験 -



益城西原消防署 予防班 消防司令 西村 博考

平成28年4月14日、益城町で震度7を記録した前震を端緒に発生した平成28年熊本地震は、当署が管轄する益城町及び西原村に壊滅的ダメージを与えた。数ヶ月が経過する現在、被災した家屋や道路の解体・復旧作業が行われているものの作業終了まで数年を要する見込みである。

平成28年4月16日未明、私は勤務先の益城西原消防署1階の事務室で、ある救助活動の無線を傍受していた。倒壊の危険性が切迫している病院内から3人目の患者が救出された直後にそれは突然起こった。「ドーン」という凄まじい地響きが起こり、激しい突き上げにより、私の体は天井近くまで飛ばされた気がした。何とか屋外にある中庭へ脱出したのだが、普段なら益城町から熊本市街地まで生活の明かりを一望できるところである筈が、その時は真っ暗な空間に、月光に照らされた土埃が、オーロラのように舞っており、被害の規模が広範囲に及んでいくであろうことが想像できた。

現在、今回の地震における被害状況等の見聞を目的に、各県等から様々な団体視察が相次いでいる。震度7の地震がいかに凄まじいものであるか身をもって体験したことを多くの方に伝えるとともに、今後地震の被害を最小限度にとどめるため、地震とどのように向き合っていくべきなのか共に考えていきたいと思う。

## - オール益城西原 -



益城西原消防署 警防課 消防司令 米村 本熊

4月14日21時26分、突然、今まで経験したことのない大きな揺れが襲い、事務室に居た本職の目の前で、書棚は倒れ机上の物が全て落下、そして停電した。

直ぐに緊急車両及び資機材の点検、車庫内に、救急資機材と簡易ベッド等の応急救護所設置を指示する。

右往左往するなか、非情にも「益城町安永地区」の建物火災指令が入り、指令内容から火災は最盛期であることが推認でき、昔テレビで見た阪神淡路大震災の光景が脳裏をよぎり、同時多発火災でないことを祈るばかりであった。

町並みは真っ暗闇の中、避難する住民を横目にポンプ車にて出場、火点に近づくとつれ空が煌々と明るく、火災最盛期の様相を呈していた。瓦礫を掻き分けながら直近消火栓に水利部署するも、断水で使用できず、仕方なく付近の防火水槽への転戦部署を余儀なくされた。

防御中も、近隣住民から倒壊家屋内に取り残された家族の救助を求める声が寄せられるが、本職を含め2隊7名しか居ない、完全に消防力を超えている、救助は後着隊に任せるしかないと決断。

動揺する隊員らに無線にて「防御活動中の各隊へ一方的に連絡、活動方針、火災防御活動を最優先とする」と指示する。

その後、ポンプ小隊3名を火災現場に残し救助現場へ転戦する、古い木造の倒壊家屋に生後8ヶ月の赤ちゃんが取り残されているとの情報、僅かな隙間からの救助を考えるが、断続的に余震が起こり進入を躊躇していると、親族ら関係者から罵声が飛ぶ。

見かねた救助隊のN隊員から「行け！と言われれば私が行きます！」と言ってくる。

本職は「もう少し待て！」と言うしかない、いや、そうとしか言えなかったのである。余震の間隔が10分間程度であったことから、次の余震後に進入するしかないと思えた矢先、震度6クラスの余震で目の前の家屋は完全に倒壊してしまった。もし、隊員らを進入させていたらと思うと今でも背筋が凍る。

4月の異動で、益城西原署勤務となり、警防課一部員の名前と顔が完全に一致しない頃、まさか熊本で数百年に一度の大地震が起きるとは、まさか震度7クラスの地震が2度起きるとは、まさか自分が勤務中に大地震が起きるとは、まさか、まさかの連続で、心が折れそうになったこともあったが、益城西原署全職員50名の侍（オール益城西原）で戦い、どうにか乗り切ることが出来た。

最後に、10年愛用スクーターが前震と余震で右へ2回、本震で左へ1回倒れ、左右のボディーの一部が破損し見苦しいため時折修理を考えつつも、そのままにしている

熊本地震の小さい身近な爪痕とし、そしてオール益城西原の団結と絆をいつまでも忘れないために・・・。

「がんばるばい！益城西原」



益城西原消防署 警防課 消防司令 林田 正治

今回の熊本地震の一回目を自宅で、二回目を消防署で経験した。

一回目の地震直後に署に駆け付け、そのまま翌日の勤務に就き、日付けが替わり二回目の地震が発生した。

経験したことがない激しい揺れで、ただ、何もできず揺れが収まるのを待つだけであった。

地震発生時には、署から既に4隊が救助事案に出場しており、署に待機していたのは6人で、自主参集で駆け付けた職員と、前日から県の応援協定で当署に参集し、グラウンドで野営していた県内の消防本部の皆さんの協力を得て、どうにか対処することができた。

瞬く間に夜明けを迎え、非常に濃密な時を過ごした。

今でも、この出来事が夢のように感じられる。

誰もが予期せぬ出来事であっただろうと思う。

今回の地震は、県内に甚大な被害をもたらした。程度の差こそあれ、誰もが物質的、精神的な被災者である。

しかしながら、私達は今回の地震を、ただ単に偶発した事象と捉えるのではなく、この出来事から何か読み取ることがあるように思う。

震災自体を振り返ることは大事なことも知れないが、ただ、悲観したり、未来を憂うことも、また、過去に囚われることもなく、何かを感じ、改めて自分を省みる良い機会と捉えてはどうだろうか。

ある被災者の、「この震災を、チャンスと捉えましょう。」という言葉を目にした。多くの人はそんな気持ち

にはなれないと思うだろうが、その人が、何を見るかの違いだけだろうと思う。

何事も、「有る」を見て「足る」を感じましょう。

御支援、御協力いただいた皆さんに感謝致します。

## - 熊本地震 -



益城西原消防署 西原出張所 消防司令 坂上 雄二

ズーン、ズーンと地響きを感じ、今まで感じたことのない下から突き上げられるような強い揺れに、タンス・茶棚などが勢いよく倒れ、横になりテレビを見ていた普段の生活時、それは突如おこり体感することとなった。

熊本地震（熊本市東区の前震・震度6弱）

である。幸いにして、倒れた家具に直撃されることもなく、揺れがおさまり冷静さを取り戻し、室内を歩き来できるよう倒れた家具をかたづけ自宅をあとにした。

自宅から近い益城西原消防署に向かう途上グラウンドメッセ南側の道路を走行中、橋の際で十センチほどの段差ができていたが、他は通常通り通行できた。

署に着くと通常点いている電気の明かりがなく、真っ暗闇の事務室は、棚などが倒れ、机も椅子もぐちゃぐちゃに散乱しており、足の踏み場もない状態だった。車庫では非常電源の電気でも薄暗く照らされた明かりのなか、職員が慌ただしく動き周って、車両は数台出場しており、どの車両がどのような事案でどこに出場しているのか、電話はひっきりなしに鳴り響いており、無線もガスの異臭、救急要請、建物閉じ込めなど絶え間ない状態である。長机を並べた上に、益城町の広い地図を置き、災害現場地点、通行不能箇所などを書き込み、白板には、出場時間、出場車両、出場場所、事案内容などを書きながらやっと状況把握ができた状態である。

橋の際の地盤沈下や、ブロック塀の倒壊による通行不能などで、消防が現場到着するまで相当の時間がかかっていた。

地面のずれや、家屋の倒壊を目の当たりにし、改めて地震の怖さを思い知らされたと共に、消防団や地域住民の方々との協力体制が必要で重要だと思った。

今回の地震でお亡くなりになられた方々のご冥福を祈るとともに、被害に遭われた方々の一日も早い復興を願うばかりである。

# - 熊本地震回顧録 -



益城西原消防署 警防課 消防司令補 佐々木 孝裕

救助小隊からポンプ小隊へ。

新年度の定期異動により、約20年間着続けたオレンジ色の服を脱ぐこととなり、寂しい気持ちと、また正規ポンプ隊の小隊長としてどのような小隊を作っていこうか、というわくわく新鮮な気持ちが入り混じった春。

新たな警防課一部米村新体制が発足し、数当務こなした4月14日勤務日の夜にその瞬間は唐突に訪れた。まさかの大地震。予想だにしない激しい揺れの中、これから起こり来る命がけの出場を予感しながらも夢ではないか、という事実を受け入れがたい気持ちを交錯させながら揺れが収まるのを待った。その間、十数秒か？

「絶対に火災の入電があるばい！準備しよう！」

揺れが取り、出場準備や庁舎内の被害状況の把握等を手分けして行いながら脳裏をかすめた阪神大震災の火災の脅威。正規のポンプ小隊長として初めての出場火災がまさか地震によるものになるとは…

停電による暗闇の中、南西方面にオレンジ色の灯りが…不安は的中した。

車両に飛び乗り現場に向かうも道路は陥没し、塀は崩れて道を塞ぎ、電柱が倒れ、建物も傾いている状況。道路のあちらこちらに避難してきた住民があふれ、不安そうな眼差しで我々を見つめている。そのような中を障害物を回避しながら進んで行く。水利部署するも断水で消火栓は使えず、あせる気持ちを抑えながら防火水槽に転戦、最盛期を越え激しく延焼する建物に対し20トンの限られた水量。放水しながら無線から聞こえてくる複数の救助現場の状況。中でも赤ちゃんが閉じ込められているとの情報には心が揺らぐ。東指揮隊も米村中隊長も益城Rも救助現場へ転戦する。元救助隊長として、そちらが気にならないと言ったら嘘になるが、現時点で火災防御の任務を遂行しているのは自分を含め機関員の竹原と隊員の田上の3人。今、俺たちがやるべきことはここを死守すること。

大きな余震が幾たびも襲ってくるが放水は絶対中断しない。消防力が圧倒的に劣勢の状況の中、必ず延焼拡大を阻止する、という強い決意で消火に挑む。そんな中、

タンク車で駆けつけてくれた非番員の仲間たち。心強かった。どうにか延焼拡大を阻止するとともに、次の現場へ。そんな時、震源地が益城町と知る。また、9歳の息子や大切な方々、仲間たちから無事を知らせるメッセージが携帯に届いているのを見てほっと胸をなでおろした。やがて夜が明けるとともに町の全貌が明らかになる。街中にポンプ車を走らせながらあまりの悲惨な光景に泣きそうになった。そして、これは再び迫りくる恐怖の前兆であり、さらなる困難な現場活動の幕開けでもあった…。我々が、今回の災害で感じた事、学んだ事。反省すべき点多々あるが、今一番感じている事。それは、夢であった消防士を拝命し、数百年に一度の大地震発生時に地元住民を守る立場にあり、災害現場の最前線で闘えた事は消防士冥利に尽きる。そして、この激動の数日間を共に乗り越えた益城西原署の仲間たちとの絆は一生忘れない。

益城地震に関わったすべての方々に感謝の念と敬意を表すると共に、益城町・西原村の再興を祈念いたします。

# - 地震に思う -



益城西原消防署 警防課 消防司令補 石原 和人

高齢者施設内で急病人をストレッチャーに乗せ移動中であつた。突然、下から突き上げられるような揺れが襲い、物が破壊される音と人の悲鳴が入り乱れるように聞こえてきた。しばらく動けなかったが、何とか屋外へ移動し、真っ白になった頭に最初に浮かんだのは、阪神淡路大震災の映像、街のいたるところで発生している火災だった。呆然となった。

家族のことが心配になるが連絡できる状況ではない。まず、目の前の患者さんを救急車に収容し、一旦署に戻ることにする。幸い患者さんは容態が安定しており、約2時間後、病院に収容することができた。署では応急救護所と指揮本部が設置され自主参集した職員や県内の緊急消防援助隊も駆け付けてきた。自主参集してきた職員の一人が「自宅も周辺も壊滅状態です」と興奮気味に話すのに対し、すぐにそこへ行けないもどかしさを感じた。いったいどれだけ被害が出ているのか想像がつかない。

その間も余震が続き倒壊家屋からの救助、救急、建物

火災が同時発生し他隊がどこで活動しているのかもわからない状況が続いていた。我々救急隊は翌日の交代まで立て続けに救急救助事案に対応し、その後は倒壊家屋からの人命検索を緊急消防援助隊と合同で行い、帰宅したのは19時頃だった。

家には益城町に在住している妻の両親と親戚が避難してきていた。地震直後から停電と断水が続く不安が募る中で活動してきたが、家族に会えて安心し、すぐに就寝した。約3時間後、2度目の激しい地震で目を覚ます。この揺れはかなりひどい。家族の無事を確認すると、バイクで消防署へ向かった。

職場と自宅で2度の震度7の地震に遭遇し、まず考えることは家族の安否だった。思えば、地震対策について家族に何一つ伝えてはいなかった。しかし職務の性質上、そばにすることはできない。家族には心細い思いをさせたが、無事でいてくれて本当に良かった。私が仕事に邁進できるのは家族があってこそだと思い知らされた。無事でいてくれたことに、深く感謝している。

## - 熊本地震を経験して -



益城西原消防署 警防課 消防司令補 坂口 勝也

4月14日午後9時20分頃、私は家で一日の疲れを癒すため、晩酌最後の一杯、息子の造ってくれた焼酎お湯割りを飲み干したところで、家族との話を楽しんでいた。すると突然、「ズンッ」と家の下で大きな生物が、地面を蹴り返した様な地響きと揺れがあったと思うと、家の中が横に揺れ、食器棚が倒れかかった。その横にいた妻が懸命に押さえていたが、揺れで動くことのできない私は、その場から手を伸ばして押さえるのを手伝ったが中の食器は落ちて割れてしまいました。今まで経験したことのない揺れに幸いにも家族皆怪我なく良かったと思いました。自主参集のため、私は息子に車で本署まで送ってもらおうと車に乗り込み出発したのですが、途中道路の亀裂や崩れが何箇所もありこの先まだ危険な箇所があるかもしれないと予測したため、一旦引き返し、西原出張所へと向かい本署に連絡を取ったのでした。それから出張所の車で本署に向かい勤務をしたのですが、余震の続く中、私は常に地面の底で何か動いているような感覚があって、また大きな地震がそのうちに来るかもしれないと思う恐怖心がありました。そして16日に本震が来たのです。私は集団転院搬送の現場活動

中で、DMAT隊の医師と搬送先病院の確認をしていました。その時、また地響きが起きたため、隊員に一旦安全な場所へ避難する事を告げた途端、自分自身が跳ね飛ばされ、地面に強打し倒れたまま動けなくなりました。その状態で上を見ると、周囲の建物や電柱、大木等が映画のワンシーンの様に大きく揺れていたのはしっかり目に焼きついています。

今回この大地震によって私自身、いや、熊本県民自身が眠れず、初めて経験する地震の恐怖を体験したことにより、今まで起きた他地方の地震の事をいかに他人事の様に見ていたのか、またどれだけ大変だったのかを理解することができた気がします。本当に緊急援助隊応援のありがたさ、救援物資等、受援のありがたさが伝わり感謝の気持ちでいっぱいになり、この場を借りてお礼申し上げます。

## - 大切なこと -



益城西原消防署 警防課 消防士長 荒瀬 達也

### 子供

前震から続く活動を終え、ようやく家に帰ると2歳になる子供が何事もなかったかのように庭で遊んでいた。しかし、私の顔を見たとき「パパァ・・・。」と言って泣きながら抱きついてきた。本当に怖かったのだろうが、気丈にふるまっていたのかもしれないと思うと、愛おしくて仕方がなかった。

その夜は、家族3人で車中泊をした。翌朝、子供が「何か、楽しかったねえ。」と言った。

子供が大きくなったら車中泊ができるようにと仕立て上げた車。

初めての車中泊があの日だった。

### 両親

実家に帰り、57時間振りに寝た。

泥のように眠る。

目が覚めると、母から風呂にでも入れと言われた。久しぶりの風呂は最高だった。

しかし、水道水が出ないのに、どうやって風呂に水をはったのか。

後々、聞いた話によると、父と母で、近所の湧き水を汲み風呂を用意してくれていたのだ。

また、翌日、勤務に行く際、家にある漬物と納屋に残る米を全て持たせてくれた。ありがとうございました。妻

地震の時、妻は妊娠8ヶ月、その上2歳になる娘もいる。一人で大丈夫かと不安だったが、前震の夜、上階に住む女性が、一人で不安そうだったのを見て、声を掛け、一緒に車の中で過ごしたと言っていた。

母は強し、惚れなおしました。

## 親戚のおっちゃん

地震の後、家が倒壊した親戚の家に行き、片付けを手伝う。車の鍵が倒壊家屋の中にあると聞いたので、中に入って見つけていると、「もうよかけん早よ出て来い。」と、おっちゃんの怒鳴り声。

私の身に何かあったら、みんなに顔向けできんと言ってくれた。

## 近所の人

妻と子供が二人で車中泊をしていると、妊娠中の妻を気遣い、数時間おきに様子を見に来てくれた人がいた。それまでは、ほとんど会話もしたことがないような人だったが、今は、無事に生まれた赤ちゃんを見ると近寄ってきて声を掛けてくれる。

この地震で、沢山の悲惨な現場を見た。

しかし、大切なことも見えた。

## - いっとどま、け死ん限り -



益城西原消防署 警防課 消防士長 下西ノ園 大地

あの地震で、忘れられない光景はたくさんある。阪神淡路大震災、新潟中越地震、東日本大震災…、「熊本はあっても阿蘇山の噴火かもね」と実家で話していたことが、やはり他人事だった。新居に引っ越してちょうど1年が経ったあの日。地震が起きてすぐ熊本に身寄りのない妻と子供3人を残し、消防署へ向かわなければならぬことが、とても情けなく、「ごめん、ごめん」と後ろ髪を引かれる思いで自宅を後にした。「まだ2～3日は強い余震が来るから家には戻らず車に寝て。パパは絶対に帰ってくるから。」と言い残して。

それから丸2日、いろいろなことを経験した。なかでも衝撃的だったのは、東熊本病院での本震。初めて「死」を意識した。活動中、建物内にいた先輩や隊長の安否、自分自身、自宅に残してきた家族も、「死んだ」と思った。持っていた携帯電話に妻からの連絡はなく、子供のそばに居てやれないことが一番歯がゆいと、自分の選んだ消防という仕事は、こんなに辛い思いをしなければいけないんだと感じた瞬間でもあった。

「いっとどま、け死ん限り、気張いやんせ！（一度くらい、死ぬ限り、頑張れ!）」まさにそんな現場だった。たぶん一生忘れることはないと思う。

その後は、消防の無力さを感じさせられる悲惨な現場ばかりで、亡くなっている方が多く、自分達には何もできないのかもしれないと感じていた。次々と転戦していく消防車内でみんなが沈黙に包まれていたとき、隊長のひとことに救われた。「雰囲気悪かね。次の現場は絶対助けるけん。」要救助者にかけるような言葉に、悔し涙と、次は絶対に助けるという強い気持ちを持ち返せた。この震災は、なにものにも変え難い貴重な経験をさせてくれた。自宅に帰り家族に会えたとき、子供を抱きしめながら「ごめんね」と言っていた。家族が無事で本当によかった。そして、職場のみんなに大きな怪我もなくこの震災を乗り越えられたのは、奇跡なのかもしれない。生きていてよかった、なにもないことが一番幸せだと感じた。

## - 熊本地震を通じて -



益城西原消防署 警防課 消防士長 松本 卓実

それは14日の夜、勤務中に突然やってきた。聞きなれない『ゴォォ』という大きな音がしたかと思った矢先、突き上げるような大きな揺れ。キャビネットは倒れ、あらゆるものが落ち、私は何が起きているのが理解も出来ず、動くことすら出来なかった。揺れが収まるのを見計らい、車庫に行くと、車両は大きく動き、駐車位置からずれ、シャッターに衝突している車両もあり、それは揺れの強さ、凶悪さを物語るものだった。しかし、出場し町の姿を見たときに、自分の想像を遥かに超える被害に息を飲んだ。道路は大きく陥没し、家の外壁は崩れ道に散乱。倒壊している家屋も見受けられ、どこが震源でどれほどの被害が出ているのか、全く想像できない状態だった。出場する際、自宅近くの建物が倒壊しているのを目にし、家族の安否が気になったが、連絡をする事

もできず、火災・生き埋め・異臭等の現場に出場し家族の安否を確認できたのは、地震が起きてかなり経ってからだった。声は上ずっているようだったが、とにかく全員怪我もなく近隣の方と避難しているようで、少しほっとした。

そして、次々入ってくる情報や出場に翻弄されているうちに、空はいつの間にか明るくなり、翌日は緊急消防援助隊と共に倒壊家屋の検索活動を行うなどし、その日の夜一時帰宅出来る事となった。自宅に帰り家族に会い、家もまだ住める状態のようで安心し、その日は疲れからかりビングで寝てしまった。

そして…前日を上回るあれがやって来た。ガラスは割れ、中にいて家が傾くのがわかった。慌てて飛び出し、家を見て、この家にはもう戻れないんだろうなと、感じながら、家族の事を近所の方々にお願いし、私は徒歩で職場に向かった。町は数日前までであったであろう明るさも活気もなく、ただただ倒壊した家が道へ迫り出し、潰れ、まるで町が死んでしまった様だった。

2度の大きな地震を体験し、助け合いの必要性、そして助けてもらえる有難さを、身にしみて感じた。以前のような町に戻るには、途方もない時間がかかると思う。しかし、半年過ぎ、徐々にではあるが復興が進みつつあると私は感じる。それも、自身が被災しているにも関わらず、互いを気遣う方々や、震災直後から現在まで、各地から応援に駆けつけてくださった皆さん。そしてあらゆる所からの励ましの声のおかげだと思う。私自身考えるのが嫌になり、立ち止まりそうになった時、沢山の方々に、励まして頂き背中を押してもらった。今回の体験を今後にかし、感謝の気持ちをいつまでも忘れずいきたいと思う。

不足と混乱がすぐに理解できた。益城署に情報を送らなければと思い、情報収集のために西原村役場へ向かった。役場内は停電していたため、対策本部は屋外の駐車場に出来ていた。机の上に大きな村内地図が置いてあり、付箋が何枚も張ってあった。この混乱の中で未確定の件はあったものの、すでに被害状況の把握はほとんど出来ていた。役場職員と地元消防団が必死に情報収集していたのだ。すぐに情報の整理を行い、消防隊投入の優先順位を消防主任と協議した。しかし、投入する消防力が圧倒的に不足していた。助けを求める声に応えられないもどかしさのなかで数時間が過ぎていった。

夜が明けると、徐々に応援隊が役場へと到着し、すぐに救助要請のある現場に向かってもらった。現場に向かった消防隊からの情報は、地元消防団や住民がすでに救出していたというものがほとんどであった。人知れず人命救助が行われ、命が救われていた。この共助こそが今回の地震で西原村の人的被害が少なかった最大の要因だろう。

地震の様な災害に対し、人間の力は小さかったかもしれない。しかし、自分自身も被災しているにも関わらず、救助活動にあたる消防団員、陣頭指揮を執る役場職員、誰一人地震に負けてはいなかった。全員使命感を持って全力で任務を全うしていた。

この人たちがいるならば、必ず西原村は復興する。そう思わせてくれる人たちと、対策本部で働けたことをこれからの消防人生の糧にしていきたい。

## - 熊本地震を経験して… -



益城西原消防署 西原出張所 消防副士長 藪 祐樹

本震発生後、すぐに家を出て益城町方面に向かった。すれ違う何台もの消防車と救急車の数で事態の深刻さがわかった。ラジオで震源は阿蘇地方という情報を聞いたため、西原村の被害が大きいと思い西原出張所へ行くことを決めた。

出張所内は電気が消え、物が倒れ誰もいなかった。固定無線で呼びかけるが、どこからも応答はなく人手



益城西原消防署 西原出張所 消防士 坂田 誠

私はこの地震で二度にわたり大きな地震を経験しました。もちろんこの様な地震は初めての経験で、はじめ何が起きているのか分からず、揺れがおさまるのをじっと待つしかありませんでした。

建物は傾き、道路は陥没し大きな被害を受けた私の地元は、今もなお仮設住宅の生活を余儀なくされています。

私は今でも、変わり果てた風景をみると、本当に心が痛みます。まさか熊本が被災地になるとは思わなかった。

県民の多くがそう思っていたと思います。

心のどこかで大規模な災害は遠い存在になっていたような気がします。

私は被災者になり、災害に対する距離感が縮まり、今では災害対策に非常に敏感になっています。

地震の前に対策していたら・・・と後悔しています。今後、日本のどこでまた大規模災害が起きるか分かりませんが、災害は起きるかも、ではなく、起きると思って、普段から生活すべきだと強く思います。

私たち被災者はこの地震を経験したから分かります。

私たちをはじめ、他県の方々にも早めの対策や訓練を真剣にやっていただきたいです。

災害は私たちの想像より遥かに恐ろしいものです。尊い命を亡くさないためにも、私たち災害経験者は、この経験を忘れず、伝えていくべきだと思います。そして、支援していただいた感謝の気持ちを忘れません。

22:55	119 (消防) (119番) (119番)	
23:00	島田 東物屋	西対応?
23:04	平山 119番 327-8	23:10 山平. 下西側. 志賀橋 23:22 山平. 119番
23:05	平山 119番 327	
23:07	宮田	可今6
23:27	宮田	
23:52	安永 東物屋	西化学
23:53	宮田	託庫
00:02	馬水 119番	西化学
00:04	地震	緊急 岩崎! 出逃 中 西指揮 DSの正確な音
00:22	馬水 805-3 10味 119番	西指揮 090 5760 0291
01:01	安永 119番	北指揮 490 490
01:11	宮田 東物屋	救急南起本!
01:25	起時 (119番)	01:16 岩崎PI 元西化学 西化学!
		西化学!

09101112 32415161718

